上野天神祭（鬼）：鬼行列の特徴②

八天は自然界に生息する小さな精霊で、行列の中で大騒ぎをする。仏教の四天王を代表する演者に続く。立派な正装に身を包んだ四天王は、彼らの地位と能力を示す古代の槍を持っている。

多くの種類の鬼が色々な衣装に身を包み、悪魔のように振舞いながら主役の役行者（634–706）を取り囲む。さらに、いたずらをしながら大きな鐘を背負った「ひょろつき鬼」が群衆の中で、子供たちを驚かせようとしている。子どもが悲鳴を上げると、それはその子どもが強く成長する兆候と言われている。

鎮西八郎為朝の行列は、鬼王剣先（きおうけんさき：大きな刀の意味）が導く。この刀は、1156 年の保元の乱で戦い、日本で今も敬われている武士、鎮西八郎為朝（1139～1170）の武術と伝説的な力を表している。鎮西八郎為朝の演者は 12 世紀の精巧な衣装に身を包んでいる。金棒を持った二匹の鬼が続き、行列の終わりを知らせる。

役行者と鎮西八郎為朝の両方の行列の後に、地元のお囃子奏者による太鼓が続き、太鼓は鬼と観客を元気づけ、お祭りの行列にリズミカルな伴奏を提供している。